新潟市潟環境研究所　平成２７年度第２回定例会議（概要）

日時：平成２７年７月２３日（木）午後３時～午後５時１５分
場所：新潟市役所第１分館１０１会議室

■会議概要

１　報告及び情報提供

・第１８回福島潟自然文化祭について（北区地域課）
・ビュー福島潟名誉館長事業について（ビュー福島潟）
・とやの物語 2015 について（事務局）
・新たな広域連携促進事業について（事務局）
・「平成 26 年度研究成果報告書」「潟マップ」「ニュースレター第 3 号」発刊について（事務局）

２　講義（内沼潟、十二潟）

「はじめまして、内沼潟ですよ。」（髙橋　剛／内沼自治会長）

・内沼潟は福島潟の兄弟潟であり、かつては福島潟とつながっていた。1680 年代、福島潟と内沼潟がつながっていた当時の水面積は約 5,800ha（約 5,800 町歩）と、旧家佐藤家文書に記録されている。
・1816（文化 13）年に築堤された山倉新道(現主要地方道新潟・五泉・間瀬線)によって、福島潟から分離されて内沼潟ができた。内沼潟は地域ではかつて「新開潟（しんがいがた、しんげがた）」とも呼ばれていた。
・戦後、周囲から干拓が進行し、業者による埋め立てが始まる直前の内沼潟の面積は約 6ha であった。この時は南東方向に細長い潟であったが、1995（平成 7）年から業者によって北東部の埋め立てが始まった。この埋め立てによって水質が汚染されていないか、年に一回、潟の水質検査を実施している。
・今までは内沼潟で何か困った問題が起こったとき、個人が個別に、豊栄土地改良区や埋め立て業者にその対応をお願いしていた。関係者同士が集まって話し合うのは、何か問題が起こった時であり、それは 10 年に 2 度だけしかなかった。しかし、2014 年からは、内沼自治会、土地改良区、埋め立て業者など関係者全員が集まる機会を作り、巡検を行っている。関係者との巡検・会議を定例化し、内沼潟を同じ目線でみることで、問題がちぐはぐになって生じる混乱を避けるためである。
・内沼潟共有者の会は 2010（平成 22）年に設立した。内沼潟の共有者は 57 人いるが、内沼潟の将来の方向性については役員 4 名に一任してもらうよう、共有者から承諾を得ている。これにより、まとまった話ができるようになった。内沼潟の方向性としては、ごみ投棄の防止や、自然公園化を目指している。
・水面積 0.6ha と、潟が小さくなった後も、3 年前くらいまではハスが潟一面に咲き誇っていた。現在はハスがまったく見られなくなったため、またハスが咲くようになればいいなと考えている。
・現在、潟をゴミ捨て場として使っている人がいる。春先、秋の収穫後と、定期的にゴミが投棄されているため、なんとかしてゴミを捨てる行為をやめさせたい。
・内沼潟は小さい潟だが、朝靄がかかるときや雪の季節には幽玄の世界を演出しており、思わず足を止めて見とれるほど美しい。内沼潟は目立たなくてもよいので、地域に生きる人の傍らで、「ちょうどよく」存在してほしいと考えている。内沼潟は内沼集落にとってはなくてはならない潟であり、地域の人と潟が共存していけたらいいなと思う。

「十二潟について」（山崎　敬雄／岡方コミュニティ委員会長）

・十二潟は阿賀野川の蛇行跡であり、三日月湖である。かつては阿賀野川の本流で、地元では「古阿賀（ふるあが)」や「前の川（まえのかわ)」とも呼ばれていた。

・1917（大正 6）年から 1933（昭和 8）年までの 17 年間、阿賀野川の堤防工事が行われた。その際、阿賀野川の蛇行部分が堤防によって切り離され、十二潟の原型ができた。

・1985（昭和 60）年頃、阿賀野川における砂利や川砂の採取が禁止になった。その頃から業者が生コンクリート用に、十二潟でも中洲で川砂を採取するようになった。十二潟の大部分は民有地であり、地権者は川砂を採取した場所に土砂を入れ、農地に戻してもらっていた。そのついでに地権者の意向で、湖面の方も埋め立ててもらうようになった。これが十二潟の湖面が小さくなっていったきっかけである。

・十二潟は農業用水池として使われていたが、昭和の終わり頃から不法投棄が進んだ。

・2001（平成 13）年 12 月、旧豊栄市で、地域のことは地域で考え自ら解決する「住民自治」の組織として、岡方地区コミュニティ委員会が立ち上がった。ここで、地域共通の資源であり課題でもあった十二潟の環境保全に焦点があてられ、不法投棄の対策として、一斉清掃が組み込まれるようになった。今も毎年 3 月下旬～4 月上旬くらいまでの間、50～60 人のボランティアでゴミ拾いをしている。その結果、十二潟のごみは年々減っている。

・2008（平成 20）年には区づくり予算で十二潟の本格的な保全にのりだし、土砂の浚渫をおこなった。翌年には、第一回水と土の芸術祭において、十二潟で昔使っていた木舟を再現した。この木舟は常時設置し、観察会や環境学習等子どもたちだけでなく、一般の方でも乗ってもらい、アサザなどを見ていただくようにしている。

・2010（平成 22）年には、潟の環境に関心をもっていただくため観察デッキを作り、また、地元住民の意識調査を始めた。そこでは、十二潟において必要だと思うこととして、不法投棄の防止、自然環境の保全があがっている。

・2012（平成 24）年以降、小中学校の総合学習の時間を利用し、潟の環境や歴史、水質調査等実施し、地域をあげて十二潟の保全活動に取り組んでいる。

・十二潟の生態系は時代と共に変わってきた。昔はたくさんの湧水があり、水量は豊富であった。また、昭和 40 年代くらいまではイトヨも多く確認された。現在はブルーギルといった特定外来生物も確認されており、これからも環境調査を継続していきたい。

・植物相も変わっている。かつて十二潟はハスとヒシで湖面が覆われていたが、戦前にはヒシしかなかったとのことである。その後土砂の流入などにより水深が浅くなり、今はアサザやガガブタが湖面に広がっている。現在水深は、深いところでも 1m20cm ほどである。

・十二潟の今後の課題は、民有地の多さと後継者育成の問題である。民有地が多く埋立てが進んでいるため、今の十二潟を残すために潟環境の啓発活動を行っていく必要がある。また、川舟（木舟）の漕ぎ手の高齢化も進んでいる。保全活動を継続して次の世代にどうやって引き継ぐか、後継者をどうやって育てていくかが、これからの課題である。